お願い、結婚してください

Hina & Kouya

冬野まゆ

Mayu Touno

エタニティ文庫

目次

お願い、結婚してください　5
書き下ろし番外編
幸せになるための一歩　325

お願い、結婚してください

プロローグ　恋と仕事

「仕事は、プライベートが充実しているからこそ頑張れるんです」
世界的自動車メーカーであるクニハラのオフィス。
海外人事統轄本部部長補佐を務める小泉比奈は、ハッキリした口調で断言する。
「よくわからんが、公私共に充実しているのはいいことだな」
上司である國原昂也にさらりと返され、比奈は思わず口を突いて出た言葉にハッとする。
この書類チェックさえ終われば帰れる――内心そう浮かれていたせいで、つい気が緩んでしまったらしい。
ここ一ヶ月ほど、仕事が忙しく残業や休日出勤が続いていたため、恋人とデートらしいデートもできずにいた。でも明日の日曜日は、彼と久しぶりにデートの約束をしている。
それを仕事の原動力にして今日の休日出勤を頑張っている……といった説明をすっ飛ばして、さっきの言葉が口を突いて出てしまったのだ。

恥ずかしさから俯く比奈に、昂也が声をかけてきた。
「プライベートが、楽しそうでなによりだ」
そう言って、昂也が爽やかな笑みを浮かべる。
その瞬間、静かな水面にさざ波が起きるように、同じフロアで仕事をする女性社員たちがざわつくのを感じた。
休日返上で仕事をする数名の女性社員にとって、いい目の保養になったらしい。
――王子様、私にまでキラキラオーラを無駄遣いしなくてもいいのに。
昂也の補佐として、いつも一緒に仕事をしている比奈は、これくらいの笑顔ではもうときめいたりしない。だが、彼に憧れる女性社員には効果絶大らしい。
一歩間違えばセクハラ扱いされかねない発言に、微塵の不快さも感じさせないのは、クニハラの王子様と呼ばれる昂也だからこそだろう。
そんなことを思いつつ、比奈は上司である昂也を眺めた。
鼻梁が高く端整な顔立ちをした彼は、背も高く肩幅も広い。
上質なスーツを上品に着こなす体は、現役アスリートのように引き締まっている。
見目麗しい風貌だけでも十分に王子様感溢れる彼だけど、知性や能力にも恵まれていた。
その上、比奈が勤める世界的自動車メーカー株式会社クニハラの創業者一族の一人と

きている。

社長の孫で、専務の息子である彼は、今は海外人事統轄本部部長という立場だが、将来的にはクニハラの社長の座が確実視されていた。

そんな外見や経歴もあって、昂也は社内外問わず女性人気がものすごく高いのである。

――今日もファンの視線が痛い。

王子様のキラキラオーラに恍惚の表情を見せていた女性社員が、そのついでといった感じで比奈を睨む。

遠巻きに向けられる鋭い視線に、比奈がため息を漏らす。

比奈にとって昂也は、あくまで上司であり、恋愛対象外だ。

なのに、彼と一緒に仕事をしているというだけで睨まれるこの状況は、理不尽だと思う。

「昂也とお近付きになりたい」「未来の社長夫人になりたい」と目を光らせている女性たちは、四六時中昂也と行動を共にしている比奈を、なにかと目の敵にしてくる。

冷静に昂也と比奈のやり取りを見れば、それが無意味な嫉妬だとわかりそうなものだが。

――ただ仕事をしてるだけなのに……

比奈としては、海外人事統轄本部という重要な部署で責任ある部長補佐を任されているのは嬉しい。でもそれによって、しばしば嫉妬した昂也ファンから嫌がらせをされる

ことには正直うんざりしていた。

昂也のせいではないとわかっていても、彼がここまで見目麗しい王子様でなければ……と、何度思ったことか。

書類に視線を落とす伏し目がちな彼の表情は、実に物憂げで美しいと思う。だがそれだけだ。

比奈にとって昂也は、王子様などではなく理想的なできる上司なのである。

彼は必要なことは丁寧に教えてくれるが、手を出しすぎることはない。部下を信頼して重要な仕事も任せてくれるので、自然と責任ややり甲斐を感じるのだ。

彼のもとで働くようになってから、以前より仕事をするのがずっと楽しくなっている。

思うに、昂也は人をやる気にさせるのが上手いのだ。

猪突猛進――というと言葉は悪いが、こうと目標を定めたら迷いなく目標地点まで突き進む。

そんな彼の姿は見ていて爽快で、周囲の人の心を魅了する。その結果、昂也が行動を起こすと自然と手を貸す人が現れ、物事がスムーズに運ぶのだ。

周囲がそういう気分になるのは、昂也が誰よりも仕事を楽しんでいるのがわかるからだろう。

――だけど……

比奈の視線に気付いた昂也が、視線で問いかけてくる。
「部長、ちゃんと休んでますか？」
二人が籍を置く海外人事統轄本部は、国際情勢を読みながら、適切な人員配置をするのが仕事だ。海外での就業は国内よりも配慮すべき点が多い。社員の職場環境や契約状況の確認はもとより、社員に同行する家族の快適な生活にも気を配る必要があった。
昂也は、海外に異動した社員の就業状況や生活状況をなにかと気にかけ、困ったことがあればなんでも相談してくれていいと声をかけている。
そしてその言葉どおり、社員から頼られれば、昼夜を問わず可能な限り力を貸していた。
仕事熱心なのはいいことだが、結果昂也の業務は煩雑（はんざつ）となり、プライベートな時間はないに等しい。
「適当に休んでるよ」
問題ないと昂也は微笑むが、直属の部下である比奈には、それが嘘だとわかっている。
「ちゃんと休息を取って、心と体をリフレッシュさせてください」
「心配ない。それより小泉の方こそ、オレのとばっちりで忙しくさせて悪いな」
仕事の手を止めた昂也が、申し訳なさそうな顔で比奈を見てきた。
人事における最終的な采配は昂也に一任されている。だが、その判断に至るまでの情報収集は比奈たち部下の仕事だった。

仕事柄、時差のある国とのやり取りが多く、どうしても残業や休日出勤が当たり前になってくる。
もともと忙しい部署だが、特にここ最近は、とある国の工場を完全に閉鎖し他国へ移設することが決まった影響で、その根回しに休日返上で奔走（ほんそう）しているのだ。
「仕事は好きなので、楽しんでますよ」
二十六歳で、これほど責任のある仕事を任されていることを誇りに思っている。残業も休日出勤も嫌々しているわけではないと、比奈は明るい口調で伝えた。しかし、最後にこう付け足す。
「でも、明日はデートです」
「なるほど、それでその爪か」
比奈の指先は明日のデートのために、新色のネイルで可愛く彩（いろど）られていた。
「はい、この秋の新色です」
「秋……少し気が早くないか？」
昂也がチラリと開放感のある大きな窓へ視線を向ける。
確かに九月に入ったとはいえ、オフィスに差し込む日差しはまだ強く、初秋というより晩夏といった方がしっくりくる。
「時代の先取りをしようかと」

少し気が早いとは思ったが、一目惚れして買ったネイルを、どうしても明日のデートに使いたかったのだ。

すました顔で返す比奈に、昂也の目尻に皺ができた。

「よく似合っている」

「ありがとうございます」

この一ヶ月、本当に忙しかった。向こうも忙しいらしく、最近は彼からの電話やメールの回数も減っている。

恋人とは、些細な出来事でも報告し合い、日常の喜怒哀楽を共有したいと思っている比奈としては、久しぶりのデートに気合が入るというものだ。

明日は二人でゆっくり美味しいものを食べながら、近況報告をしたいと思っている。

「じゃあ、明日はデートの邪魔をしないように電話は控えよう」

そう言いながら、昂也の視線はもう書類に戻っている。

「よろしくお願いします……」

休日でも、情報把握のため昂也から電話がかかってくることがたまにあった。

比奈としては仕事とプライベートはきっちり分けたいのが本音だが、昂也がむやみやたらと電話をかけてくるわけではないことも承知している。

彼が休日に電話してくる時は、その必要に駆られた時であり、昂也の向こうに返答を

待っている誰かがいるのだ。

それを承知していて、知らん顔はできない。

「どうしても必要な時は電話してください」

「ありがとう。でも、よほどのことがない限りは控えるよ」

そつのない笑顔を添えて昂也が答える。

――その顔、なにかあっても自分一人で処理する気だ。

仕事熱心なのはいいが、仕事に情熱を注ぐあまり、自分が休むことを忘れているのではないかと心配になる。

電話が迷惑なわけではない。

昂也が休息を取るためにも、彼が電話してこなくてはならないような、緊急事態が起こらないことを願うばかりだ。

「しつこいようですけど、部長こそ、たまには仕事をしない休日を作ってくださいね」

「考えておくよ」

念を押す比奈に、書類を見ながら昂也がさらりと返す。

――全然、考えてない言い方だ……

働き過ぎて、尊敬する上司がいつか倒れるのではないかと心配になる。だからつい、おせっかいかと思いつつも意見してしまうのだ。

「休日に好きな人と楽しい時間を過ごすと、気持ちが充電できて、また仕事を頑張ろうって気になりますよ」
比奈の提案に、昂也が書類から顔を上げて真面目な視線を向けてくる。
「悪いが、着飾った女性との上辺だけの恋愛ごっこには飽きたんだ」
でも、助言はありがたく受け取っておくと、付け足された。
「ごっこ……。いや、私は本気の恋愛の話をしているんですけど」
「オレにとっては、似たようなものだ。女性を満足させることにも、女性に満足させてもらうことにも飽きてしまったんだよ」
抜群の容姿と成熟した男の色気を漂わせる昂也が言うのだから、見栄や嘘でないだろう。
それでもつい、非難がましい視線を向けてしまう。
そんな比奈の視線に気まずさを感じたのか、昂也が肩をすくめた。
「少年期によく学び、青年期によく遊び、壮年期を勤勉に務める。オレの立場を考えれば、理想的な生き方だと思うが？」
「それは、まあ……」
クニハラの社長の座が確実視されている立場の人間としては、確かに理想的な生き方なのかもしれない。

「もう、恋愛ごっこで遊ぶ年でもない。それより今は、会社が一番大事だ」
そう断言した昂也が、フロア全体を見渡して薄く笑った。
意志の強さを感じさせる未来のリーダーを頼もしく思う反面、もう少し自分のための時間を持ってはどうかと思ってしまうのだが……
まだなにかあるかと視線で問われ、比奈はなんと言っていいかわからなくなる。
「いえ。……書類に問題がないようでしたら、私はこれで帰りますが」
昂也は一通り書類に視線を走らせて、満足そうに頷いた。
「問題ない。助かった」
眩しいくらいのキラキラオーラを振りまきつつ、昂也が微笑む。
その笑顔でまたフロアにさざ波が起こるが、気付かないフリをしておく。
「では、お先に失礼します」
忘れ物がないかチェックして、比奈が一礼する。
「明日はデート楽しんで」
鞄を肩にかけた比奈に向かって、昂也が手を上げた。どうやら彼は、まだまだ帰るつもりはなさそうだ。
部長こそ……という言葉を、比奈はため息に変えて吐き出す。
この時の比奈は、まさかその数日後、自分が昂也に仕事をセーブしてもらうことを切

に願う日がくるなんて、欠片も思っていなかった。

1　バタフライエフェクト

「また仕事かっ！」

翌日、久しぶりに会った彼――山井達哉とのデート終盤。

予約の必要な人気イタリアンでのディナー中、不意に達哉が吐き捨てた。

「はい？」

仕事の電話のため中座して戻ってきたばかりの比奈は、思わず素っ頓狂な声を上げる。

テーブルには、デザートの皿が置かれていた。

フルーツや生クリームが添えられたカシスシャーベットの上には、精巧なチョコレート細工の蝶が添えられている。

そんな可愛いデザートを前にして、達哉は怖い顔で比奈を睨んでいた。

「あの、食事中に電話してごめん」

とりあえず、彼の怒りの原因であろう電話について謝罪する。

謝りながらも頭のどこかでは、さっきの昂也からの電話について考えていた。

少し教えて欲しいことが……と、申し訳なさそうに切り出してきた声は、どこか緊張していたように思う。手短に用件だけを伝えすぐに電話を切ったので事情まではわからないが、電話は控えると宣言していた昂也がわざわざ電話をかけてきたのだ。それ相応の事態が生じていることは容易に想像がつく。

――なにがあったんだろう……

海外事業は、その国の社会情勢の余波をもろに受ける。

政治的な影響や災害の影響などで操業を数ヶ月止めることもあるし、最悪の場合、撤退に追い込まれることもあった。

――ネットになにか情報が出てないかな？

無意識にテーブルに置いたスマホへ視線を向けると、達哉に露骨なため息を吐かれる。

「ほんと仕事人間だな」

ハッとして彼に視線を向けると、恐ろしく不機嫌な顔をしていた。

久しぶりのデートなのに、仕事の電話に出たのは確かに悪かったかもしれない。

「そんなつもりはないよ」

その証拠に、今日は二人の時間を楽しむべく、こうやってデートをしているのではないか。

だから「せっかくのデザートを一緒に味わおう」と、比奈がスプーンを手に取る。だ

が、達哉がスプーンを手にする気配はない。
それどころか、比奈の言葉を拒否するように、腕を組んで睨んでくる。
険しい表情で黙り込む達哉に、比奈はしゅんと口を噤み、スプーンをもとの位置に戻した。
愛らしいデザートに手をつけることなく互いに黙り込んでいると、テーブルの端で比奈のスマホが震える。
画面を見ると、再び昂也からだ。
咄嗟にスマホに手を伸ばしかけた比奈を責めるように、達哉が拳でテーブルを叩いた。
驚いた他の席の客が、チラチラとこちらを窺ってくる。その間に昂也からの電話は切れた。
「……」
——どうしよう、絶対なにかトラブルが起きてる。
眉を寄せてスマホに視線を向ける比奈の姿に、達哉が再び大きなため息を吐いた。
「お前、仕事とオレ、どっちが大事なんだよ？」
「え？」
思いがけない言葉に、比奈はポカンとする。
「最近の比奈、仕事ばっかりだな。ガツガツしてて女として終わってる」

「……なっ」
——なんですとぉっ！
あんまりな言葉に、比奈が声にならない声を上げる。
仕事にガツガツしているつもりはない。
ただ、責任のある仕事を任されているのだから、全力で頑張りたいと思っているだけだ。
もちろん、女を捨てた覚えもないし、仕事と同じくらい達哉のことを大切に思っている。
それなのに、こんなことを言われるのは納得がいかない。
「どっちも大切だよ！　でも、誰かと関わって仕事をしている以上、たとえ休日でも無視できない電話はあるでしょ？」
お互い社会人として何年も仕事をしていたら、それくらいわかるはず。
そんな気持ちで言い返した比奈に、達哉が何度目かわからないため息を吐く。
「そんな状態でお前、もし結婚したらオレのこと支えられるの？　家事とかどうする気？　ちゃんと両立できるのか？　オレと結婚したいなら、その時には定時で帰れる部署に異動させてもらえよ」
「……っ」
その言葉に、比奈は呆然として言葉を失う。
達哉と付き合って一年と少し。二人の間では、ちらほらと結婚をほのめかす会話が出

始めていた。
だけど今の達哉の言い方は、結婚後は働きながら比奈が全ての家事を負担するように聞こえる。
しかもそのために、部署を異動しろというのはどういうことか。
それに結婚するのであれば、どちらかが一方的にどちらかを支えるのではなく、互いを支え合うものではないのだろうか。
幾つもの疑問符が、心の中に沸き起こる。
――そこまでして、結婚していただかなくても結構です。
恐ろしく不平等な要求に、つい衝動的に言い返しそうになった。でも、それをぐっと我慢する。
このタイミングで比奈が感情のまま言い返せば、達哉がヒートアップするのは目に見えていた。
だからといって、このまま結婚に関する価値観のズレを見逃すこともできない。
どうやってそれを伝えようかと悩んでいると、比奈のスマホがまた震えた。
比奈の状況を知りつつ、電話をかけ直してくるなんてよほどの事態だ。
――ごめん。やっぱり知らん顔なんてできない。
達哉に怒られることを覚悟して、スマホを取った。

「もしもし、小泉です」
電話に出ると、昂也が遠慮がちに『何度もすまない。今いいかな？』と、確認してくる。
――もちろん大丈夫なわけがない。
そうは思うのだけど、出てしまった電話を切るわけにもいかない。
「大丈夫です」
スマホを持っていない方の手でごめんと謝る比奈に、達哉は舌打ちした。
『以前、小泉に任せたＥＵ圏の……』
彼のことは気になるものの、昂也の一言で頭が仕事モードに切り替わる。
そんな比奈の視線の先で、達哉が乱暴に立ち上がった。
「あ……」
昂也の話を聞きつつ、思わず小さな声が漏れる。
焦る比奈に、達哉が冷めた声で言い放つ。
「オレの好みって、おとなしくて可憐な感じの子なんだよね。職場に手作りのお菓子を差し入れしてくれたり、忙しいオレを心配してメールをくれたりする、可愛い子。比奈みたいに仕事ばっかのガツガツした女、ちょっと無理だわ」
「達哉、ちょっ……待って」
スマホを離し、呼び止めようとする比奈に達哉がトドメの一言を告げた。

「もう別れる。最近、他にいいなって思う子がいるし」
「……？」
——なんだそれは。
達哉の言葉に、比奈の頭がフリーズする。
さっきの妙に詳しいたとえ話は、そういう子が職場にいるということなのか。
だとすれば、彼が比奈に向けていた怒りは、自分を正当化し別れ話を切り出すためのただのパフォーマンスということになる。
比奈がそれを確かめるより早く、「じゃあ」と言って、達哉が店を出て行く。
——ちょっと待って、これで終わりなの？
こんな一方的な別れ方、受け入れられるわけがない。
追いかけようと腰を浮かしたところで、電話の向こうから昂也の声が聞こえた。
『もしもし、小泉、どうかしたか？』
少し前の自分なら、仕事より恋愛を優先していたかもしれない。でも昂也の下で働くようになって二年、自分なりに仕事に誇りを持っているので、この状況で電話は切れない。
「……な……んでもないです」
達哉との今後を考えたら、今すぐこの電話を中断して彼を追いかけるべきだろう。でも、自分で上司の電話を取ると決めた以上、先にこちらの用件を済ませなければならない。

「大丈夫です。続けてください」
比奈は達哉を追いかけることを諦め、深く椅子に腰を下ろす。
視線の端では、いつまでも手をつけてもらえないシャーベットが溶け出し、チョコレート細工の蝶に水滴がついていた。
見るともなく傾いていく蝶を眺めながら、この状況で仕事を優先している自分はかなりまずいのではないかと思う。
仕事もプライベートもどちらも充実させることを目標としているはずなのに、気が付けば昂也に負けず劣らず、かなりの仕事人間になっているではないか。
その事実に愕然とした。
そんな比奈を嘲笑うかのように、水滴を纏って傾いていた蝶がシャーベットの上からズルリと滑り落ちる。白い皿の上に転がる蝶を涙目で見つめつつ、比奈は仕事の電話を続けるのだった。

◇　◇　◇

翌日の月曜日。
細々とした雑用を済ませてオフィスに戻ろうとした比奈は、エレベーターの扉が開い

た瞬間、出てきた相手とぶつかりそうになる。
「あらっ」
そう言って驚きの声を漏らしたのは、比奈と同期の柳原涼子だった。
違う部署に勤める涼子とは同期の中でも仲がよく、時間が合えばよくランチに行ったりしている。
同い年だが、どちらかといえば童顔な比奈に対し、背が高くシャープなボディーラインの涼子は大人びて見える。
「おはよう」
比奈が挨拶をすると、涼子が肩をすくめた。
「もう、おはようって時間じゃないけどね」
時刻は十一時過ぎ。涼子が言うとおり朝の挨拶をするには、ちょっと遅い。
艶やかなストレートの長い髪を揺らし、涼子は比奈とすれ違うようにエレベーターを降りてくる。
そしてクルリと比奈を振り返って、自分のこめかみを指で叩いた。
「今日は眼鏡？　珍しいわね」
比奈は苦笑いしつつ自分のこめかみに手を当てる。
「コンタクトが上手く入らなくて」

昨日の出来事を口にするにはまだ傷が生々しく、咄嗟に嘘をつく。
「もしかして秋の花粉症？　お気の毒様」
涼子はいたわりの言葉を残し、指をヒラヒラさせて閉まる扉の向こうへ姿を消した。
軽く手を上げて涼子を見送った比奈は、動き出すエレベーターの中で眼鏡の隙間からヒリヒリと痛む瞼を指で押さえた。
達哉とは、あの後まともに話し合うことすらできなかった。電話してもすぐに留守電に切り替わるし、何回かメッセージを送って、やっと返って来たメッセージはたった一言「もう、連絡してこないで」だけ。
そんな一方的すぎる別れを、そう簡単に消化できるはずもなく、昨日は悔しさのあまり散々泣いた。
一晩泣き明かした結果、瞼が酷く腫れてしまい、仕方なく今日は伊達眼鏡をかけている。
「小泉。ちょっといいか」
気持ちが下がっていると、自然と視線も下がってしまう。目的の階でエレベーターを降り、とぼとぼと廊下を歩いていた比奈は、名前を呼ばれてハッと顔を上げる。
声のした方を向くと、書類を手に昂也が歩み寄って来た。
「……部長？」

比奈の前に立ち止まった昂也がやけに近い。
そう思った次の瞬間、彼が腰を屈めて比奈の顔を覗き込んできた。
少し背伸びをすれば、互いの唇が触れてしまいそうな距離に息を呑む。
「あの……？」
彼の纏う香水が感じられるほどの距離に、比奈は咄嗟に上擦った声を上げる。
「危険だから、やめてください！」
「危険？」
――こんな場面を見られたら、部長のファンに殺される。
昂也が不思議そうな顔をしつつ、比奈から少し離れてくれた。
「目をどうかしたのか？」
「ああ、コンタクトが上手く入らなくて」
彼から微妙に視線を逸らしつつ、涼子に言ったのと同じ嘘をつく。
すると昂也が、書類を持っていない方の手で比奈の顎を掴み、くいっと持ち上げた。
「……っ！」
キスをされそうな距離に、驚き硬直する。そんな比奈に構うことなく、昂也は再び至近距離で比奈の顔を覗き込んできた。
思いがけず、間近から見た昂也の顔はやはり端整で美しい。

大多数の女性が、彼を独占し自分の恋人にしたいと思うのは当然だろう。社の内外に、彼のファンが多いのも納得がいく。
そんな状況ではないと思いつつも、つい昂也の顔をまじまじと観察してしまった。
「失礼」
そう言って、昂也はすぐに比奈の顔から手を離した。
「あの……」
――今のは一体なんだったのだ。
戸惑う比奈に、昂也は持っていた書類を差し出す。
「これ、専務のところに届けてくれ。昨日の件に関する概要と、今後の見通しについてだ」
いつもの口調で話す昂也は、比奈の疑問に答える気配はない。
比奈は彼の答えを諦め、書類を預かった。
「承知しました」
昂也の言う専務とは、彼の父親である幹彦のことだ。
顔を合わせると話が長くなるからという理由で、昂也が専務への書類を部下に届けさせることはよくあることだ。
「昨日は、デート中に悪かったな」
静かな口調で詫びる昂也が、口元に笑みを浮かべつつ「だが助かった」と付け足す。

「……大変なことになりましたね」
昨日の電話は、近々工場の閉鎖を予定している国で大規模な反対デモが起き、その対処に関する連絡だった。
デモが起きた後、すぐに連絡の取れない現地駐在員が多くいて、そのうちの一人が、たまたま入社当初の比奈の上司だった。彼が海外へ異動する際、元上司という縁で比奈がいろいろと相談に乗っていた。その経緯を知る昂也が、比奈なら会社の把握していない本人や家族の連絡先を知っているのではないかと連絡をしてきたのだった。
比奈の知る情報により、彼は家族共々無事であることがその後すぐに確認できたらしい。
だが、なかなか連絡の付かない駐在員もいたため、結局全員の安否確認ができたのは今日になってからということだった。
「ああ……」
昂也の表情に、疲労の色が見える。昨日から、ずっとこの件の情報収集に奔走していた昂也は、ろくに休んでいないのだろう。
もしかするとさっきの意味不明な行動は、疲れた脳が誤作動したせいかもしれない。そう無理やり納得した比奈に、昂也が声をかける。
「小泉のおかげで、早々と一件確認ができて助かった」

そう言ってもらえると、あの時、電話を無視しなくてよかったと思える。その代償はかなり痛いものになったが、比奈に後悔はなかった。
「お役に立ててよかったです」
素直な思いを口にする比奈に、昂也がふっと微笑む。
「昨日の礼を兼ねて、一緒に食事でもどうだ？」
そろそろ昼休みというタイミングでそう言われ、比奈はランチミーティングだと理解する。
慰労を兼ねて、同じ部署のスタッフ同士意見交換をしようと提案しているのだろう。
比奈はさっそく、昂也へ必要事項を確認する。
「何人で予約しますか？　お店の希望は？」
時間的に予約を入れるには微妙なタイミングだが、やりようはある。出かける時間を確認しようとする比奈に、昂也が首を左右に振って声のトーンを落とした。
「ランチミーティングじゃない。君一人を夕食に誘っている。店はオレの方で予約しておくから心配しなくていい」
「……はっ？」
怪訝そうな顔をする比奈に、昂也が「昼休みはさすがに寝かせてくれ」と、疲れた顔で笑う。

それなら無理に食事に行かなくていいのでは？　そう提案するより早く、昂也はオフィスへ引き返していった。

預かった書類に視線を向けつつ、比奈は思い切り顔を顰める。

「部長と二人きりで夕食って……誰かに見られたら、間違いなく身の破滅かも……」

思わず本音が零れるが、上司の誘いを断るわけにもいない。比奈はため息を吐いて、書類を手に再びエレベーターのボタンを押した。

最上階にある専務の執務室へ行くと、専務秘書である丹野雅が出迎えてくれた。名前のとおり整った顔立ちをした丹野は、比奈を見るなり表情を輝かせた。しかし、周囲に昂也の姿がないとわかると、あっという間に眉を寄せる。

「部長の代理で来ました」

専務への取り次ぎを頼むと、比奈にだけ聞こえるように舌打ちし、専務のところへ確認に行った。

閉ざされた扉を見つめて、比奈は頬を引き攣らせる。

――これだから、あんまりここに来たくないんだよね……

熱烈な昂也ファンである丹野は、自分こそ昂也の補佐に相応しいと思っているらしい。そのため、比奈を快く思っていないのだ。

結果、比奈を目の敵にし、昂也がいないといつも攻撃的な態度を取ってくる。

専務の秘書を務めるくらい能力が高いのに、やっていることはかなり大人げない。

まさに恋は盲目といったところだろう。

比奈がため息を漏らしたタイミングで、再び扉が開き中に招き入れられる。

執務室に入ると、専務の幹彦が親しみを込めた表情で迎えてくれた。彼の顔にも、昂也同様疲労の色が浮かんでいた。

比奈は、「國原部長からの報告書をお持ちしました」と、表情を改めて書類を手渡す。

「ご苦労様」

幹彦は日本人にしては彫りが深く、健康的に日焼けした顔の目尻や頬には年相応の皺が刻まれている。普段はどこか飄々とした雰囲気のある幹彦だが、受け取った書類の文字を追う顔つきは、大企業の重責を担う者としての風格が漂っていた。

「では失礼します」

仕事の邪魔をしてはいけないと、一礼して退室しようとする比奈を幹彦が手の動きで呼び止めた。

「……？」

なにか昂也に言付けでもあるのだろうか。そう思って指示を待つ比奈に、幹彦は応接用のソファーを示した。

「急ぎの用がないなら、少し私の休憩に付き合ってくれないか？」
「……はい」
突然そんなことを言われて戸惑う。幹彦に見えない場所からこちらを睨んでいる丹野が怖いが、比奈に専務の依頼を断る度胸はなかった。
幹彦は丹野に二人分のコーヒーと頂き物の菓子を用意するよう頼み、応接用のソファーへ移動する。
促された比奈も、幹彦の向かいのソファーに腰を下ろした。
「引き留めてすまない。少し、昂也の下で働く子の意見が聞いてみたくてね」
穏やかな笑みを浮かべてそう切り出す幹彦は、すぐに表情を真面目なものに切り替える。
「昨日の大規模な反対デモにより、工場の閉鎖を早めた方がいいのではという意見が出ている。それについて、君はどう思う？」
幹彦の問いに、比奈は顎に指を添え少し考えてから自分の意見を伝える。
「それは、あまり賢くないやり方だと思います」
「ほう」
比奈の意見に、幹彦が楽しそうな声を出す。そうしながら、視線で先を促した。
「あの地域を含む国の政治情勢を考えれば、今回の工場閉鎖は避けられません。けれど、

昨日反対デモを起こした人たちは、これまでよき労働者でした。その人たちの労働に対する感謝を忘れ、逃げるみたいに閉鎖を早めれば、反感を買いこれまでの関係も無になります」
「撤退を決めた国の労働者でもか？」
試すような視線を向けてくる幹彦に、比奈はしっかりと頷いた。
「はい。今後、よき購買者になってもらうためには、必要なことだと思います」
比奈の言葉に、幹彦が自分の膝を叩く。
「同感だ、私もそう思う。君のその意見は、昂也の教えによるものかな？」
「はい。國原部長はいつも『社員は労働者であると同時に、顧客でもある。だから社員一人一人に寄り添っていくべきだ』と、話しています」
「そうか。昂也はきちんと部下を教育しているらしいな」
比奈の言葉に、幹彦が満足げに頷いた。
――なるほど。
比奈をお茶に誘ったのは、そういうことか。
部下を通して昂也の仕事ぶりを確認したかったのだろう。
そのタイミングで、丹野がコーヒーとチョコレートを載せたトレイを運んできた。
チョコは、比奈も知っている銀座の名店のものだ。以前、猫の舌をイメージしたデザ

インのチョコを食べたことがある。
その味を思い出し、少なからず心が弾んだ。
向かいの幹彦がコーヒーを飲むのを見て、自分もカップに手を伸ばす。しかし、香り高いコーヒーを一口飲んだ瞬間、比奈は思わず顔を顰めた。
「……っ」
「どうかしたか？」
グッと顎に皺を寄せる比奈に、幹彦が怪訝な表情を向ける。
「いえ、なんでもありません」
――このコーヒー、死ぬほど苦いっ！
先ほど幹彦は、コーヒーを飲んでも平然としていた。つまり、異常に苦いコーヒーを出されたのは比奈だけということだ。
幹彦の背後に控える丹野に視線を向けると、すました顔でそっぽを向く。
二人のそんなやり取りに気付く気配のない幹彦が、比奈に言う。
「そうか。これからもアイツのサポートを頼むよ」
「かしこまりました」
そう頭を下げる比奈の視界の端で、丹野が悔しげに唇を噛んだ。しかし、不意に幹彦に振り向かれ、慌てて表情を整えている。

「丹野君、少し席を外してもらっていいかな？」
「えっ？」
幹彦の指示に一瞬不満げな顔を見せた丹野だが、上司の指示に従いすぐに執務室から出て行った。
それを確認し、人差し指を唇につけた幹彦が比奈へ視線を戻す。そして、昂也と似た茶目っ気のある表情で質問してくる。
「是非、若い女性である君の正直な意見を聞かせて欲しい。アイツの補佐として働く君の目から見て、昂也は男性としてどうだ？」
「はい？」
突然、話が飛んだ。そのことに戸惑う比奈に、幹彦がため息を吐いた。
「私の耳には、アイツの浮いた噂ひとつ聞こえてこんが、昂也に恋人と呼べるような女性はいるのかな？」
先ほど人差し指を唇に当てたのは、内緒で教えて欲しいという意味だったらしい。
「今はいらっしゃらないようです」
一昨日昂也とした会話を思い出し、そう答える。
「じゃあ逆に、アイツに好意を持っていそうな女性はいそうかね？」
「それは……星の数ほど」

「その中で、アイツが興味を持ちそうな女性は？」
「……今のところは」
それを聞いた幹彦は口角を落とし、天井を仰ぎ見た。
「そうか。困った奴だ……」
浮いた噂もなく仕事に邁進する姿勢は、未来の経営者として望ましいものではないのだろうか。
首をかしげる比奈に、幹彦が苦笑いを浮かべた。
「今回のデモの件が収束するまで、アイツの周辺はしばらく慌ただしくなるだろう」
もちろん昂也の補佐役である君も、と視線で付け加えられ、比奈がこくりと頷くと幹彦が続ける。
「それが落ち着いても、またすぐに新しいトラブルがやってくる。大企業のトップなんて、日々何かしらのトラブル解決に追われているものだ。そして困ったことに、それが楽しくて仕方がない」
アイツの生き方は自分と同じだからわかると、幹彦が笑った。
確かにいつも楽しそうな昂也の働き方を見ていれば、それは容易に想像できる。
「今後、より責任のある地位に上れば、アイツは今以上に仕事漬けの生活になるだろう」
「そうですね」

その予測に比奈が同調すると、幹彦が困り顔で言う。
「親としては、そうなる前に結婚して欲しいのだが」
「ああ……」
幹彦の本当に言いたかったことを理解して、比奈が気の毒そうな顔をする。
「見合いを勧めても、アイツは忙しいと言って興味を示さん。強引に見合いの場を用意しても、仕事を口実にすっぽかす。実は心に決めた恋人でもいるのかと思ったが、やっぱり違うか」
「残念ながら」
心底同情する比奈に、幹彦が苦笑して肩をすくめる。そしてからかうように比奈を見た。
「よけいなお世話かもしれないが、もしそういう相手がいるなら、君も早めに結婚しておいた方がいいぞ」
「はい？」
不思議そうな顔をする比奈に、幹彦が再び茶目っ気たっぷりに脅かしてくる。
「我が息子ながら、昂也は、日々の全てを仕事に捧げているみたいな奴だ。この先も次から次へと問題が舞い込むだろうし、アイツも嬉々として仕事にのめり込むのは目に見えている。アイツは周囲を乗せるのが上手いから、一緒になって仕事にのめり込んだ挙句婚期を逃した……なんてことになっても、こちらは責任の取りようがないからな」

軽い口調でそう言った幹彦は、美味しそうにコーヒーを飲む。
「アハハ……」
冗談なのはわかるが、すでにその兆候が見られるだけに比奈としては笑えないものがある。
頬を引き攣らせる比奈に視線を向け、幹彦が表情を真面目なものにした。
「昂也は君の能力を随分と買っているようだ。この先部署が変わっても、君を補佐役として連れて行きたいと頼まれている」
「それは……光栄です」
その言葉に嘘はないが、喜びと同じくらい、背筋に冷たいものが走る。
「だがそうなれば、冗談でなく君も今以上に忙しくなるぞ」
「……っ」
比奈の目標は、仕事とプライベートの両方を充実させることだ。
けれど、今以上に忙しくなった時、比奈のプライベートはどうなるのだろう。
仕事第一主義の昂也は、仕事だけでもいいのかもしれない。だが、比奈は違う。
「それが正しい反応だ。アイツのように、人生の全てを仕事に捧げる必要はない」
比奈の表情を見て、幹彦が優しく笑う。
皺の寄る目尻に、昂也との血の繋がりを強く感じた。

「たとえば、今以上に忙しくなった時、君が家庭を持っていればアイツの対応も変わってくると思う。まさか、家庭をかえりみずに休日返上で仕事をしろとは言うまい」
確かに、休日は家族と過ごしていると知っていれば、仕事の連絡を控えてくれるかもしれない。
逆を言えば、この先プライベートが充実していないと、今以上に休みの日でもどんどん仕事が舞い込んでくるということだろうか。
もしそうなら、昨日恋人と別れたばかりで、プライベートが充実しているとは言えない比奈は……
「残……念ながら、今は結婚を考えている人はいません……が、専務にいただいたアドバイスは、肝に銘じておきます」
掠れる声をなんとか絞り出す。
「そうか。もし決まったら報告してくれ。その時は是非、息子の補佐をしてもらっている礼に、私からも祝いの品を贈らせてもらう」
幹彦は、「アイツも結婚でもすれば、もう少し上手い働き方ができると思うんだが」とぼやき、飲み終わったコーヒーカップをソーサーに置く。
それを話の終わりと察した比奈は、恐ろしく苦いコーヒーをチョコと一緒に無理矢理飲み干し、ソファーから腰を浮かせた。

そんな比奈に、幹彦はふと前屈みになり声を潜めてくる。
「アイツ、実は同性と……なんてことは……」
幹彦は、いたって真剣な様子だ。
我が子を心配する父親の想像力は恐ろしい。
確認したことはないが、絶対に違うと断言できる。それは、先日の会話でもわかることだ。
それに、昂也の部下になって約二年。昂也が偶然すれ違う艶やかな女性と、意味ありげなアイコンタクトを交わす場面を幾度も見かけたことがある。
そうした女性は大抵、妖艶な大人の魅力に溢れていた。
たとえ昂也の言うところの恋愛ごっこだとしても、彼の恋愛対象は女性で間違いない。
それも、とびきりの美人だ。
さすがにそのことを詳しく話すのは憚られるので、心配はいらないとだけ言い、比奈は専務の執務室を後にした。
執務室のドアの前にある秘書専用のブースから顔を出した丹野に「なんの話してたの？」と、しつこく聞かれたが、コーヒーの恨みがあるので笑顔で無視する。
なにより、幹彦に言われた未来予想図で頭の中がいっぱいで、それどころではなかった。
不安に駆り立てられつつフロアの廊下を足早に歩く。

仕事を認められているのは、もちろん嬉しい。
だけど仕事は、プライベートが充実しているからこそ頑張れるのだ。
このままいくと、本当に専務に言われたとおり、昂也共々仕事人間まっしぐらになってしまう。
比奈は真剣に、先ほど幹彦が懸念していた可能性について考えてみた。
――冗談じゃないっ！
容易に想像できてしまう未来に、比奈は心の中で叫んだ。
この先も彼の下で仕事を続けたいなら、早急に新たなパートナーを見つけなくてはならない。
自分の仕事を理解してくれる男性と結婚し、仕事もプライベートも充実させる。
それが比奈の理想とする人生なのだ。
早いところ手を打たないと、時間を持て余してうっかり仕事に邁進してしまうかもしれない。
「ダメダメ！」
そんなの冗談じゃない、と首を横に振る。比奈は迫り来る恐怖を振り払うように、エレベーターのボタンを連打した。
しかし……と、比奈は改めて自分の日常を顧みる。

現状でさえ、恋人にフラれるほど忙しいのに、その中でどうやって結婚相手を見つけたらいいのだ。それどころか、新しい恋人を見つけるのも難しいのではないかという気がしてくる。

このままではまずいと焦りを覚えながら、比奈は到着したエレベーターに乗り込むのだった。

◇　◇　◇

その日の夜。昂也に連れて行かれたのは、会員制のステーキレストランだった。

比奈は昂也と並び、鉄板で腕を振るうシェフと向き合うカウンター席に腰掛けている。

「昨日、酷く泣いたのか？」

シェフの調理に気を取られていると、不意に昂也が問いかけてきた。

「……っ」

驚いて息を呑み、咄嗟にどう返すべきか悩む。

おずおずと昂也に視線を向けると、彼は自分の眉間を叩いて言った。

「お前、普段からコンタクトなんてしてないだろ」

「よく気付きましたね」

涼子は、それで誤魔化せたのに。

気まずさから眼鏡のフレームを触る比奈に、昂也が言う。

「気付くだろ。小泉は人の目をしっかり見て話す。お前がオレの目を見て話す時、オレもお前の目を見てるんだからな。今日は、目がいつもより腫れぼったい」

「ああ……」

疲れている中、わざわざ食事に誘ってきたのは、自分を心配してのことだったのか。

昼間、比奈の顎を持ち上げて顔を覗き込んできたのも、疲れた脳の誤作動などではなく、いつもと違う比奈を観察していたのだ。

気になったら確かめずにいられない昂也らしい行動だが、会社の廊下でするには、あらぬ誤解を招きそうなので以後やめてもらいたい。

「オレの電話のせいで、恋人と喧嘩したのか？」

視線を向けると、昂也が気遣わしげな視線を向けてくる。

暖色系の照明に照らされる昂也の横顔に、会社の彼とは違う大人の色気を感じた。

比奈は昂也から視線を逸らし、派手な炎を上げる鉄板を眺めながら口を開く。

「部長の電話は……関係ないです」

昂也の電話は、きっかけに過ぎない。

今まで気付かなかっただけで、比奈が恋人に求めるものと、達哉が恋人に求めるもの

が違っていたのだ。達哉にフラれたのは確かに痛い。けれど、彼のあの口調からして、遅かれ早かれ別れを切り出されていただろう。

それに、女性が全ての家事を負担するべき、女が男を支えるべき、という彼の結婚観は受け入れがたいものがあった。

昂也の電話がなくても、どのみちいつかは別れていただろう。

「そうか……」

はっきりと断言する比奈に、昂也が安心した様子で頷いた。そしてシェフのパフォーマンスに視線を向けつつ付け加える。

「愚痴を言ってスッキリするなら聞くぞ。独り言のつもりで話せばいい」

その台詞で、昂也が食事の場にステーキレストランを選んだ理由がわかった。

恋愛の愚痴など、上司に面と向かって話せるわけがない。

こうやってカウンター席に並んで、目の前のパフォーマンスを眺めながらの方が話しやすいだろうという配慮だろう。

デモに巻き込まれた社員に対するのと同じくらい、昂也は部下の自分を気にかけてくれている。

本当にいい上司だと思う。

「せっかくこんな高級なお店に連れてきていただいて申し訳ないんですけど、私の目が

腫れているのは、昨夜彼と泣ける映画を観て号泣したからです」

「……は？」

昂也が間の抜けた声を上げる。

チラリと視線を向けると、想定していなかった返答に驚き、瞬きをする昂也と目が合った。

普段よく見る厳しい表情との落差につい笑ってしまう。

「気遣っていただいたのに、無駄な出費になってしまいましたね」

努めて明るい口調で話す比奈に、昂也が「いいさ」と笑う。

「昨日の礼と日頃の労をねぎらう意味で、美味いものを食わせたかったからな」

ちょうど、食べやすいサイズにカットされた肉が目の前に並べられていく。

いただきます、と軽く手を合わせて、昂也が食事を始めるので、比奈もそれに倣う。

絶妙な火加減で内側に閉じ込められた肉汁が、噛んだ瞬間口内に広がる。

「美味しいっ」

口元を手で覆い、思わず声を上げる。そんな比奈に、昂也が何気ない口調で尋ねてきた。

「昨日のデートは、楽しめたか？」

嘘を吐くことに後ろめたさを感じつつ、肉を頬張っているのをいいことに、首の動きだけで答える。そして咀嚼した肉を呑み込むなり、強引に話題を変えた。

「そういえば昼間お使いに行った時、専務が部長にそろそろ結婚して欲しいって零してましたよ」
「そうか……」
たちまち昂也が渋い顔をする。
きっと本人にも、再三結婚の催促をしているのだろう。
「私の心配より、まずはご自分の結婚相手を探した方がいいんじゃないですか」
「面倒くさい」
比奈の提案をあっさり却下し、昂也はワインを呷った。
「不遜な言い方になるかもしれないが、クニハラの跡取り息子の結婚ともなれば、それ相応の式を挙げることになる。そうなれば準備だけでも一苦労だ」
「式の準備が面倒だから、結婚しないんですか？」
呆れる比奈に抗議するように、昂也が大きく息を吐く。
「そう言うけどな、会社同士の付き合いやら、親族の序列とパワーバランスやらを配慮して招待客を決めたり、配席からスピーチの順番を決めたり……考えただけでうんざりする」
親族の結婚式で、よほど面倒くさい実例でも見たのかもしれない。
昂也は心底嫌そうな顔で、結婚することで生じる面倒事の数々を指折り数えて挙げて

いく。
まあ確かに、昂也の立場での結婚ともなると、比奈が思う結婚とは根本的に違ったものになるのだろう。結婚式の前には結納もあるし、新居を決める必要もある。式を挙げたらその足で、新婚旅行にも行くはずだ。確かに忙しそうだ。
でも、そこまで忙しくしていれば、周囲も昂也に持ち込む相談事の量を加減してくれそうな気もする。
「忙しいのなんて、ほんの一時期だけですよ。それを乗り越えれば、いい思い出になるんじゃないですか」
そう話す比奈に、昂也はわかってないと首を横に振る。
「家庭を持てば、今までのペースで仕事をするわけにはいかないだろ。部屋に観葉植物を置くのとはわけが違う。常に相手の生活ペースや気持ちに配慮する必要がある」
確かに、社員への気配りを欠かさない昂也のことだ。いざ結婚すれば、家族を思うよき家庭人になるかもしれない。きっと、達哉のように自分を支えろ、家事をちゃんとしろなどと、自分の利益だけを相手に求めたりはしないはずだ。
「配慮……なんて重い考え方しなくても、好きな人と結婚すれば、自然と相手の生活リズムに合わせたいとか、一緒にいたいと思うようになりますよ」
専務の言うとおり、昂也は結婚して帰るべき場所ができたら、今より節度を持った働

き方をしそうだ。そうなれば、彼のアシスタントである比奈のプライベートも確保できるのではないか……

――そうよ、その手があったじゃない！

比奈が妙案を思いついたのと同時に、昂也がパチンと指を鳴らす。

「それだっ」

そう声を上げた昂也は指を比奈の方へ向け、悪戯を思いついた子供のようにニヤリと笑った。

「どうしたんですか？」

得意げな昂也の表情に、比奈は嫌な予感を抱く。

「小泉の言うとおりだ。オレが結婚しないのは、仕事量を減らしてまで一緒にいたいと思う相手がいないからだ。小泉の好きそうな言葉を借りるなら、まだ運命の恋とやらに出会ってないということになるな」

「……はっ？」

――突然なにを言い出すのだ。

呆れる比奈に、昂也は得意満面な様子で続ける。

「諸々の面倒を乗り越えてでも結婚したいと思える相手に出会えたら、その時は迷わず結婚する。今度、親父に聞かれたら、そう言っといてくれ」

恋愛さえご無沙汰な人がなにを言う。

「つまり、結婚する気はないんですね」

隣へ冷ややかな視線を向ける比奈だが、頭の中ではめまぐるしく考えを巡らせていた。猪突猛進な彼のこと。もし本当にそんな相手が現れたら、恋にのめり込み、宣言どおり結婚するのではないか。そうなれば、周囲だって昂也に配慮して、闇雲に相談事を持ち込んだりしなくなる。昂也に持ち込まれる相談事が減れば、自然と比奈の仕事量も減り一石二鳥だ。

つまり、昂也が結婚するだけで、連鎖的に周囲が幸せになっていく。

――バタフライ効果、バタフライエフェクト。

目まぐるしく回転する比奈の頭に、学生時代耳にした言葉が思い浮かぶ。

ブラジルの一匹の蝶の羽ばたきは、テキサスで竜巻を起こすかという講演の話をもとに、蝶の羽ばたき程度の僅かな力が加わることで、予測不能な変化が生じるのではないか……といった仮説定義の際に使われた言葉だったように思う。

自分の恋愛やプライベートを充実させる方法にばかり気を取られていたが、逆に昂也に恋人ができる方が比奈やその周辺に大きな幸せをもたらすのかもしれない。

「小泉、どうかしたか？」

自身の考えに没頭する比奈の顔を、昂也が覗き込んできた。

意識を引き戻された比奈は、今しがた閃いたアイディアに目を輝かせて頷く。
「いえ、なんでもないです。次に専務にお会いした際には、必ずお伝えします」
「ああ……そうしてくれ」
昂也は一瞬、変な顔をしたが、「任せた」と言って、食事を再開する。
その後、仕事の延長のような世間話をしつつも、比奈は頭の中で今後についての計画をあれこれ練り始めるのだった。

2　恋の策略

ホテルのラウンジで人を待つ昂也は、長い脚を持て余すように組んで、ソファーの肘掛けに頬杖をつく。
今日はこれから、人と会うことになっている。
その人物は海外情勢に詳しく、先日デモが起きた国に滞在していた経験があるそうだ。外部の意見を聞くことは非常に参考になる。
企業に属していると、どうしてもその企業の風潮に染まったものの見方になり、考え方が偏ってくる。そのため、自分とは違った視点で物事を捉える人の意見が重要になる

立ち読みサンプル
はここまで

のだ。
今日会うのは、その考えをよく知る比奈から、是非、食事でもしながら意見交流をしてはどうかと提案された人物だ。彼女が勧めるくらいなのだから、有意義な食事会になることは間違いない。
そういった期待からか、思いのほか早く待ち合わせ場所に着いてしまった。
自分と別行動を取っていた比奈からは、珍しく時間に遅れると連絡があった。
二年前から補佐役となった小泉比奈は働き者で、いつも楽しそうに大量の仕事をこなしてくれている。と同時に、彼女はプライベートもしっかり楽しんでいる様子だ。
だが最近、そんな比奈の様子が少しおかしい。
これまでは、時々世間話程度に自分の恋人について話すことがあった。だが、最近はまったくと言っていいほど恋人の話をしなくなり、代わりに昂也の恋愛話をやたらと聞きたがる。
――別に、疾しい過去があるわけじゃないから、聞かれても構わないのだが……
昂也が正直に答える度に、嫌そうな顔をして唇を噛みしめるので扱いに困る。
まあ、恋愛や結婚に夢を抱いているらしい比奈からすれば、割り切った男女の関係を楽しむだけの昂也の恋愛スタイルは受け入れがたいものがあるのだろう。
価値観は人それぞれだ。受け入れられないならほっといてくれればいいのだが、最近